



No. 154

ティークレイク

Tea Break

ハイが付く三大飲料の話

会員 若林 擴

ウイスキーやブランデーを水や炭酸で割ったものを「ハイボール」と称し、焼酎の炭酸割り飲み物を「チュウハイ」といい、酒、焼酎など何にでも割れるレモンと炭酸とガムシロップを加えた「割り材」(Mixing drink 又は Mixer とも言う)の一つに「ハイサワー」があるが、予めこの「割り材」で酒、焼酎などを割って出来上がったアルコール飲料も「ハイサワー」という。

Wikipediaによれば、「ハイボール」はアルコールベースに大きな割合のノンアルコールの割り材 (Mixer) とのミックスからなり、初めはライ・ウイスキーとジンジャーエールから造られたが、1898年頃、「whiskeyを飲む」ことを「ball」と言ったことから、背の高いグラスで供されたためと言う説、1895年ニューヨークのパーティー、パトリック・ダフイーが発明したと言う説、即ち駅員が列車をスピードアップさせる合図に、先端にボールを付けたボールを高く上げたのに倣って、氷の入った背の高いグラスにスピリッツとジンジャーエールを素早くミックスしたドリンクに「ハイボール」の名前を付けたという説。また「ハイボール」はディナーの前に飲むカクテルに対抗して、まだ日が高いうちからリフレッシュするために飲まれるからという説もある。

Jack (Daniel) and Coke, Scotch and Soda, Seven (Seagram's 7 whiskey) and Seven, The Moscow Mule, Gin and Tonic, 等も「ハイボール」の仲間だそうだ。

ウイキペディアによると、チューハイ (酎ハイ) は、蒸留酒を炭酸水で割ったアルコール飲料。もともと「焼酎ハイボール」の省略であり、焼酎のうちでも低価格で風味の乏しい甲類焼酎を炭酸水で割り、レモン果汁等で味付けして、大衆酒場で供された飲み物だそうだ。

1945年 (昭和20年) 頃、終戦直後、酒といえば東京の下町で焼酎を炭酸で割った「焼酎ハイボール」を出した

ところ、「酎ハイ」の愛称で人気を得てたちまち全国に広まった。その後、焼酎ハイボールを略して東京の下町 (城東) 京成電鉄の沿線では「ボール」の呼び名も定着し、目黒 (城西) で生まれた博水社が命名した「サワー」の別称も生まれた。

博水社の二代目社長が「我輩のサワー」の意味で「輩 (ハイ) サワー」と命名したが、「サワー」の名称は全国チェーンの居酒屋などでも使われ、「お客さん終電ですよ」のテレビコマーシャルで「ハイサワー」は一挙に有名になり飲み屋に浸透していった。

ノンアルコール飲料が流行る今日、「ハイサワー」は単なる割り材 (Mixing drink 又は Mixer) の役割から自立して、アルコールと割らずにそのまま飲まれ、醗酵工程を経ず、ホップから香りや苦味のエッセンスを抽出し、レモン果汁と炭酸を加えたビアーテイストのハイサワーは、特殊製法による長持ちする泡であるが故に、気分はビヤー、気分はシャンパンと、酒を飲まない人も、ドライバー又は病人などで、飲んではいけない人も、アルコール飲料を飲んでいる人と違和感無くパーティー等で溶け込み、見た目はビヤー、見た目はシャンパンの洒落たイメージを醸しつつある。

以上のように、戦後「ハイ」がつく三大飲料「ハイボール」「チュウハイ」の一つになりつつあるのが「ハイサワー」である。焼酎割り用飲料は小企業を守る分野調整法に守られ、大企業が進出できない特殊な分野なので、この法律の恩恵に浴した割り材飲料業界は、道路交通法の飲酒運転に対する罰則の強化を追い風にして、ノンアルコール全盛時代に繁栄を謳歌している。

因みに「ハイボール」「チュウハイ」は普通名称であり、誰でも使用出来るが、「ハイサワー」は登録商標である。